

風土記の丘の花だより²²⁴

今、そしてこれから見られる植物(2024年2月24日)

季節外れの暖かい日が続いたかと思うと、また冬の寒さ。最近、気候がおかしくなっているように感じていましたが、今年は殊更です。今回、紹介しませんが、万葉植物園以外でシキミの花がきれいな所を見つけました。小早川家の上の広場の左すみ、いままで全く気づきませんでした、とてもキレイに咲いていますよ。



すっかり日本の風土に溶け込んだ外来植物、オオイヌノフグリが咲き出しました。春と言え、この花を忘れる訳にはいきませんね。フグリとはご承知のように男性の股間にあるブラブラしたもののことで(失礼!)実の形が何となくそれに似ているからこんな名前になりました。イヌノフグリは風土記ではまだ見たことがありません。花はもっと小さく紫色です。かつては和歌山城の石垣などでよく見かけましたが、今でもあるのでしょうか。



ミチタネツケバナの白い花も目立ってきました。根元にたくさん葉があることで、タネツケバナとは、はっきりと区別できます。また茎に毛がほとんど生えていないことも特徴の一つです。ちなみにタネツケバナの茎には写真のようにたくさんの毛が生えています。



「よく見るけど、こんな草に名前なんかあるの?」と言いたくなるような草です。本当にどこにでも生える、言ってみれば「しょうもない草」です。でもちゃんと名前はあります。スズメノカタビラというイネ科の草です。スズメというのは植物名に付ける接頭語みたいなもので「小さい」という意味を持ちます。カタビラは「帷子」と書いて、単衣の着物のことだそうです。でもどこがどうカタビラなのか、牧野図鑑を読んでも私には理解できませんでした。



221号でふきのとうを紹介しましたが、それが今、花茎を伸ばし、花が咲いています。ふきのとうはキク科の植物フキのつぼみのことです。それが成長して花を咲かせるのです。フキには雄株と雌株があり、写真は雌株に咲いた雌花です。ふきのとうは天ぷらにしても、さっとゆでて酢味噌で召し上がってもおいしいので、山菜として重宝されます。先日たくさんのふきのとうが、突然なくなっていました。山で見つけたものはその人のものではなく、山を愛する人みんなのもので、感動をみんな

共有することが山歩きの基本です。特にここは国指定の特別史跡内ですからね。 松下